

A Study on the Effect of Cognitive Dissonance on Learning

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23358

認知的不協和の学習に及ぼす効果に関する研究

太田 雅夫

A Study on the Effect of Cognitive Dissonance on Learning

Masao OHTA

目的

Festingerは、認知的不協和に関して「不協和の存在は、不協和を低減し又は除去する圧力を生ぜしめる。不協和を低減する圧力の強さは不協和の大きさの関数である」とし、不協和は動因、要求又は緊張の状態と同じように作用すると考えた。動因が行為を惹起するように、不協和は行為を惹起するものであるから、不協和は一種の動因の状態にあるとする仮説である (Festinger, 1957)。不協和が存在すれば、それを低減しようと動機づけられる。つまり認知要素間にみられる不協和を動因の状態と見做すと、それを低減しようとする。この不協和低減の仮説はしばしば個人の心理過程に適用されてきた (Brehm, 1959) が、特に個人の心理過程の中でも態度変化や学習への動機づけに関する適用が多い。他方、集団の相互作用にも適用されてきた (Aronson & Mills, 1959)。

学習への内発的動機づけは Bruner, J.S. 以後、種々研究されてきた。そして内発的動機づけの一つとしてこの認知的不協和が検討されてきた。この研究は、認知要素として、幾つかの見解を取り上げ、それらの見解の理解過程において生じる認知的不協和が見解の学習 (記憶) に対して如何なる効果を及ぼすかという点を明らかにすることを目的として実施された。認知的不協和が動因の状態とすれば、これはまた一種の動機づけられた状態と考えることが可能であろう。ここでは、認知的不協和を惹起する要素間の逸脱度を測り、解消すべき意識としての疑問や理解不可能状態は認知的不協和の反映としてそれ

らの評定を試みたが、動機づけられた状態そのものを独立変数として扱ってはいない。しかし、疑問をもったり、理解できないという意識を、間接的に動機づけられた状態として取り扱うことにしよう。

方法

被験者；大学2年生 (英語科) 56名であった。

日時；1993年11月30日社会心理学の授業中に実験を実施した。認知的不協和を調べるための一連の調査は授業の始めに継続して実施した。記憶検査は、授業終了前に30分程度を当てて行なった。調査と記憶検査の間は通常の授業を行なった。

調査；認知的不協和をみるため調査1から調査3までを実施した。記憶検査は記憶種類別の記憶量を調べた。

まず調査1では、20の見解に対して妥当だと思うか否かを質問した。この質問紙調査は、例えば「家を重んじることは、封建制思想の名残である」というものや「人類は猿から進化した」のような知識・理解に関するもの、「フロンを使用することは、中止すべきである」、「タバコを吸うことはよくない」のような態度に関するもの等で構成されていた。Janis & King (1954)の研究において用いられたものに類似的な予測を示す見解も含まれていた。これらの見解に対して被験者は、妥当だ、妥当ではない、どちらでもないの3件法で回答するよう求められた。

調査2では、20の見解が妥当かどうかという意味での正解を示した。この正解は調査1での被

験者の妥当性の判断との間に逸脱を示すもので、この逸脱度は認知的不協和を生じさせるものと考えられる。そして正解とされた判断について疑問を感じるか、もっともだと思いかについて被験者の考えを尋ねた。これは意識としての認知的不協和が正解によって生じたか否かを調べる一つの指標とみなされた。

次に、調査2で示した正解の妥当か妥当でないかの判断の根拠を「正解の理由文」として被験者に提示した後、調査3では、被験者が各判断について、よく分かったかどうかを尋ねた。

「分からなかった」の解答のなかには正解が被験者自身の意見と反対である場合を含めたが、この「分からなかった」という回答も、認知的不協和の意識の残存を示すもう一つの指標とした。

記憶検査は、20の見解について正解を記憶しているかどうかを調べるものであった。解答の順序は自由であった。見解毎に正解の理由文に即して記述している場合には2点、いかなる点に関して見解が述べられていたかという見解のテーマのみを記述している場合や正解に即していない見解の記述には1点を与えた。正解に即さない見解は、被験者の不変の信条や確固たる認識を示すものではあるが、正解によって、何らかの見解の変容が生じたか否か、何らかの学習が生じたか否かを見るためにこの得点化を行った。

結果

1 見解に対する妥当性の判断

1) 見解に対する妥当性

被験者は各見解に対する妥当性の判断に対して、妥当であることを1点、どちらでもないを2点、妥当でないを3点という評定を行なった。見解に対する妥当性の判断の平均値および標準偏差等を示すと表1の通りとなる。比較のため正解欄には、見解を妥当だとするか妥当でないとするか、どちらでもないとするかの判断の正解を示している。各見解ごとに標準偏差が極めて小さい見解（見解5；.353，見解15；.384）と比較した場合、大きい見解（見解12；.850，

見解6；.809）は倍以上の標準偏差をもつことが分かる。

表1 見解に対する妥当性の判断（調査1；Ⅱ）

見解	平均値	(正解)	S D
1	1.125	(1)	.470
2	2.696	(3)	.502
3	2.268	(3)	.774
4	1.382	(1)	.680
5	2.857	(3)	.353
6	2.000	(1)	.809
7	2.321	(3)	.575
8	1.554	(1)	.737
9	1.643	(3)	.724
10	1.545	(1)	.765
11	2.839	(3)	.458
12	2.018	(3)	.850
13	2.364	(3)	.677
14	1.393	(3)	.705
15	1.125	(1)	.384
16	1.304	(1)	.601
17	2.518	(2)	.572
18	1.339	(3)	.695
19	1.571	(1)	.599
20	2.429	(3)	.735

2) 妥当性判断の正解からの逸脱度

調査1の各見解に対する妥当性の有無の判断の結果を基にして、それらの判断が正解からどの程度逸脱するかを逸脱度として、その平均値およびS Dを示したのが表2である。各見解に対する妥当性の有無の判断から正解となる判断を差し引いた値を逸脱度とした。したがってこの平均値が小さい程被験者の判断が正解に近いことを示している。当然、この逸脱度は、正解と被験者の妥当性判断の間に認知的不協和を惹起する可能性を現すものと考えられる。

なお調査では妥当だが1，妥当でないが2，どちらでもないが3であったが、どちらでもないを2，妥当でないを3と変換した3件法で正

解からの逸脱度の平均値などを算出している。

これらの結果から、逸脱度の比較的小さい見解と逸脱度の比較的大きい見解を分類した。そして逸脱度の小さい7箇の見解を「容易な見解」、逸脱度の大きい6箇の見解を「困難な見解」とした。その他の7箇の見解は中間的なものと考えられる。表2の「分類」欄には容易なもの、困難なものにそれぞれ印を付けて示している。

表2 正解からの逸脱度（調査1；S I）

見解	平均値	SD	分類
1	.125	.470	○
2	-.304	.502	○
3	-.732	.774	*
4	.382	.680	○
5	-.143	.353	○
6	1.000	.809	*
7	-.679	.575	
8	.554	.737	
9	-1.357	.724	*
10	.545	.765	
11	-.161	.458	○
12	-.982	.850	*
13	-.636	.677	
14	-1.607	.705	*
15	.125	.384	○
16	.304	.601	○
17	.518	.572	
18	-1.661	.695	*
19	.571	.599	
20	-.571	.735	

注) ○印は、容易な見解。*印は困難な見解を示す。

容易な見解群、困難な見解群、その他の見解群の各1見解当たりの正解からの逸脱度の平均値の差を検定すると、容易群と困難群の差 ($t = 17.092$, $p < 0.001$), 困難群とその他の群の

差 ($t = 27.667$, $p < 0.001$) は有意である。

2 正解からの逸脱度と認知的不協和

1) 疑問の程度

各見解の正解に対する被験者の疑問は、認知的不協和からもたらされたもので、解消すべきものであると考えられる。2つの認知的要素間の距離とも言うべき逸脱度に対して、この疑問は認知的不協和に因って生じた内発的動機づけの状態をあらわすものと見ることができよう。各見解の正解に対して疑問を感じる場合を1点、もっともだと思ふ場合を0点として、平均値及び標準偏差を求めると、表3のようになる。

表3 疑問の程度（調査2；J）

見解	平均	SD	分類
1	.000	.000	○
2	.214	.414	○
3	.339	.448	*
4	.196	.401	○
5	.071	.260	○
6	.625	.489	*
7	.304	.464	
8	.286	.456	
9	.518	.504	*
10	.410	.496	
11	.036	.187	○
12	.339	.478	*
13	.179	.386	
14	.696	.464	*
15	.089	.288	○
16	.196	.401	○
17	.321	.471	
18	.750	.437	*
19	.214	.414	
20	.179	.386	

注) ○印は容易な見解、*印は困難な見解を示す。

この各見解に対する疑問の程度は、正解からの逸脱度と関連があると考えられるから、当然のことではあるが、容易な見解は正解に対する疑問を感じることは少なく、困難な見解は疑問を感じる大きいが、見解10は、困難な見解以上に疑問を感じる見解で、困難な見解と類似している。

容易な見解群、困難な見解群、その他の見解群の各1見解当たりの疑問の程度の中位の差を検定すると、容易群と困難群の差 ($t=36.441, p<0.001$)、容易群とその他の群の差 ($t=8.289, p<0.001$)、困難群とその他の群の差 ($t=12.731, p<0.001$) は有意である。

2) 疑問の有無別逸脱度

次に、容易な見解、困難な見解、その他の見解別に正解からの逸脱度と疑問の有無の関連をみることにしよう。表4は正解からの逸脱度の段階別に疑問の有無(疑問を感じないを0、疑問を感じる1)別人数を示している。

表4-1 容易な見解

疑問	0					1							
	逸脱度	-2	-1	0	1	2	計	-2	-1	0	1	2	計
1				52	1	3	56						0
2			6	38			44	1	9	2			12
4				39	4	1	44			1	5	5	11
5			6	46			52		2	2			4
11	1	5	48				54	1		1			2
15			50	1			51				4	1	5
16			43	1	1		45				8	3	11

表4-2 困難な見解

疑問	0					1							
	逸脱度	-2	-1	0	1	2	計	-2	-1	0	1	2	計
3	3	8	26				37	8	11				19
6			17	4			21			1	16	18	35
9	5	14	8				27	23	6				29
12	3	14	19				36	16	2	1			19
14	5	5	7				17	36	3				39
18	5	2	7				14	39	3				42

表4-3 その他の見解

疑問	0					1							
	逸脱度	-2	-1	0	1	2	計	-2	-1	0	1	2	計
7			19	20			39	3	13	1			17
8				32	6	2	40			1	9	6	16
10				28	3	2	33			6	9	7	22
13	3	16	26				45	3	7				10
17			22	16			38		2	1	15		18
19			26	17	1		44			1	9	2	12
20	1	14	31				46	7	2	1			10

容易な見解の正解からの逸脱度は、0のこと多く、しかも疑問が無であることが断然多い。しかし困難な見解の正解からの逸脱度が大きい場合で、疑問を持つ者が著しく多い。その他の見解は、容易な見解と困難な見解の中間的傾向である。

3 認知的不協和と見解の理解度

1) 見解の理解度

調査3の結果に見られる見解の理解度を見ることにしよう。正解の理由文を熟読した後、よく分かったを2点、分かったを1点、分からなかった(自分の意見が反対の場合を含む)0点として理解度とし、平均値及び標準偏差を示すと表5のようになる。この平均値が小さいほどよく理解されなかった正解の理由文であることを示している。

各見解に対する理解度は、容易な見解と困難な見解と関連があると見られる。表5をみると容易な見解は平均値が小さく、困難な見解は大きいという傾向が認められる。しかし、見解20にみられるように、その他の見解の中には困難な見解と差異がない見解もしばしば見受けられる。

容易な見解群、困難な見解群、その他の見解群の各1見解当たりの理解度の平均値の差を検定すると、容易群と困難群の差 ($t=14.930, p<0.001$)、容易群とその他の群の差 ($t=$

7.354, $p < 0.001$), 困難群とその他の群の差 ($t = 4.342$, $p < 0.001$) は有意である。

表5 見解の理解度 (調査3; K)

見解	平均値	SD	分類
1	1.107	.312	○
2	1.339	.514	○
3	1.607	.705	*
4	1.286	.594	○
5	1.285	.456	○
6	1.875	.788	*
7	1.500	.632	
8	1.679	.664	
9	2.018	.587	*
10	1.661	.668	
11	1.357	.554	○
12	1.768	.763	*
13	1.564	.660	
14	2.000	.793	*
15	1.218	.417	○
16	1.607	.679	○
17	1.732	.587	
18	1.857	.724	*
19	1.339	.478	
20	2.054	.699	

注) ○印は容易な見解, *印は困難な見解を示す。

2) 疑問の有無別 見解の理解度

理解度が0の場合は、理由文を読んで後にも認知的不協和が残っていると考えられる。そこで、理解度と疑問の有無の関連を見ることにしよう。表6は、疑問の有無別 見解の理解度別人数を容易な見解、困難な見解、その他の見解ごとに示したものである。

容易な見解では、理由文を読んでよく分かったが断然多く、分かったの場合も多い。従って、よく分からなかった(自分の意見と反対)は少ない。正解を見せられた後、疑問を感じな

かった場合で、理由文がよく分かったおよび分かったが多く、疑問を感じ、理由文が分からなかった者は少ない。

困難な見解では、容易な見解と比較して、理由文を読んでよく分かった、分かったの場合が相対的に少なく、従って、よく分からなかった(自分の意見と反対)は多い。正解を見せられた後、疑問を感じなかった場合で、理由文がよく分かったおよび分かった者が少なく、疑問を感じ、理由文が分からなかった者は増加する。このことは、困難な見解では、認知的不協和を反映して疑問を感じる者が多く、その疑問が理由文を読んでも解消しないため、この人数が多くなるのであろう。

その他の見解では、容易な見解と類似するものが多く、理由文を読んでよく分かった、分かったの場合が多い。見解の中には分かったの方がよく分かったよりも多い見解がみられる。よく分からなかった(自分の意見と反対)はほとんどの見解で少ない。

正解を見せられた後、疑問を感じなかった場合で、理由文がよく分かったおよび分かったが多く、疑問を感じ、理由文が分からなかった者は少ない。見解20は、困難な見解と同程度に理由文が分からなかった(または自分の意見は反対である)と答えている。しかしそれは、妥当性の判断で正解に疑問を感じなかった者の中に多いという特徴を示している。

その他見解10や見解8でも、疑問を感じ、理由文がよく分からなかった者がかなり見られる。このことは、妥当性に関する判断の正解からの

表6-1 容易な見解

疑問	0			1		
	2	1	0 計	2	1	0 計
1	50	6	56			0
2	34	9	44	4	8	12
4	39	5	45	5	3	11
5	38	14	52	2	2	4
11	38	14	54	2		2
15	42	8	50	1	4	5
16	26	16	45	2	6	11

表6-2 困難な見解

疑問	0				1			
	2	1	0	計	2	1	0	計
3	24	11	2	37	5	9	5	19
6	16	4	1	21	5	17	13	35
9	4	18	5	27	5	19	5	29
12	16	14	7	37	8	7	4	19
14	8	6	3	17	9	15	14	38
18	7	6	1	14	12	20	10	42

表6-3 その他の見解

疑問	0				1			
	2	1	0	計	2	1	0	計
7	27	11	1	39	5	9	3	17
8	23	15	2	40	1	11	4	16
10	19	13	1	33	6	12	5	23
13	28	14	3	45	1	7	2	10
17	14	20	4	38	5	13		18
19	32	12		44	5	7		12
20	11	25	10	46	1	4	5	10

逸脱度が中程度はあり、疑問を感じる見解に対して、理由文が不協和を解消することが出来なかったか、さらに不協和を増大させたかであることを示唆するであろう。

4 認知的不協和と記憶

1) 見解の記憶量

表7は各見解の記憶量の平均値及び標準偏差を示している。容易な見解は多くは平均が低く、記憶され難い傾向が見られる。しかし、見解14や見解18のように記憶量の平均の高いものも見られる。被験者の見解がそのまま正解として示された見解でも、はっきりと記録されるものがあるからであろう。また、困難な見解は全般に記憶量が高いものが多い。しかしここにも平均の低いものが見られる。ただ、これらの結果をみる場合には、客観的にみられる逸脱量を

もって不協和の程度とすることが妥当かどうかという検討が先決である。

表7 見解の記憶量 (記憶検査; L)

見解	平均値	SD	分類
1	1.589	.781	○
2	.982	.981	○
3	.911	.859	*
4	.804	.981	○
5	1.304	.933	○
6	.786	.967	*
7	1.411	.757	
8	.643	.903	
9	.321	.575	*
10	.661	.900	
11	1.321	.897	○
12	.661	.900	*
13	1.071	.912	
14	1.446	.601	*
15	1.286	.929	○
16	.643	.862	○
17	.554	.737	
18	1.250	.879	*
19	.839	.968	
20	.286	.624	

注) ○印は容易な見解, *印は困難な見解を示す。

容易な見解群, 困難な見解群, その他の見解群の各1見解当たりの記憶量の平均値の差を検定すると, 容易群と困難群の差 ($t=6.423, p<0.001$), 容易群とその他の群の差 ($t=11.017, p<0.001$), 困難群とその他の群の差 ($t=2.333, p<0.05$) は有意である。

2) 疑問の有無別 記憶量

容易な見解, 困難な見解, その他の見解ごとに, 疑問の有無別 記憶量別人数をみると, 表8の通りとなる。容易な見解では, 疑問無しで記憶0の人数の多い見解がよく見られる。

困難な見解では、疑問がなくて記憶されていない見解が多く認められるのに対して、疑問を有しているがよく記憶されている見解が比較的多い。その他の見解は、容易な見解と困難な見解の中間的分布となっている。

これらの傾向は、困難な見解の場合が正解からの逸脱度が大きい、その見解では疑問も大きく、認知的不協和を醸し出しており、よく学習されるということになる。これに対して、容易な見解は、正解からの逸脱度が小さく、被験者は正しい判断をもつことが多いのであるが、その学習は余りなされていない。これ等の結果は、仮定に添ったものである。

表 8-1 容易な見解

疑問	0				1			
	0	1	2	計	0	1	2	計
1	10	3	43	56				0
2	21	3	20	44	6		6	12
4	26		19	45	7	1	3	11
5	18	3	31	52			4	4
11	16	5	33	54		1	1	2
15	17	4	30	51	1		4	5
16	27	7	11	45	7	1	3	11

表 8-2 困難な見解

疑問	0				1			
	0	1	2	計	0	1	2	計
3	16	9	12	37	7	6	6	19
6	12		9	21	21	2	12	35
9	20	7		27	21	5	3	29
12	24	4	9	37	11	1	7	19
14	2	6	9	17	1	19	19	39
18	5	2	7	14	11	8	23	42

表 8-3 その他の見解

疑問	0				1			
	0	1	2	計	0	1	2	計
7	8	7	24	39	1	8	8	17
8	23	4	13	40	13		3	16
10	23	1	9	33	12	4	7	23
13	20	6	20	46	1	4	5	10
17	24	10	4	38	9	5	4	18
19	23	3	18	44	8		4	12
20	39	3	4	46	6	3	1	10

3) 疑問の有無別 理解度別 記憶量

表 9-1 容易な見解

1

疑問	0				1			
	0	1	2	計	0	1	2	計
理 2	8	3	39	50				
解 1	2		4	6				
度 計	10	3	43	56				0

2

疑問	0				1			
	0	1	2	計	0	1	2	計
理 2	15	3	16	34	3		1	4
解 1	5		4	9	3		5	8
度 0	1			1				
計	21	3	20	44	6		6	12

4

疑問	0				1			
	0	1	2	計	0	1	2	計
理 2	22		17	39	3		2	5
解 1	3		2	5	2		1	3
度 0	1			1	2	1		3
計	26		19	45	7	1	3	11

5

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	13	3	22	38				2	2
	1	5		9	14				2	2
	0									
計		18	3	31	52				4	4

11

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	12	5	21	38					
	1	3		11	14		1	1	2	
	0	1		1	2					
計		16	5	33	54		1	1	2	

15

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	15	3	24	42	1			1	
	1	2	1	5	8				4	4
	0									
計		17	4	29	50	1			4	5

16

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	14	5	7	26	1		1	2	
	1	11	1	4	16	4	1	1	6	
	0	2	1		3	2		1	3	
計		27	7	11	45	7	1	3	11	

容易な見解は、正解をみせられて後に疑問を感じるときで、正解の理由文をみせられてなおよく分からなかった（または自分の意見は反対）ときは、全般にあまり多くない。そして、記憶される場合（L=2または1）は少ない。正解をみせられて後に疑問を感じないときで、

正解の理由文をみせられてよく分かったとき（K=1または2）は、当然記憶される人数が多い。

しかし、見解によっては記憶されない場合も見られる。

表9-2 困難な見解

3

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	8	9	7	24	1	3	1	5	
	1	6		5	11	5	1	3	9	
	0	2			2	1	2	2	5	
計		16	9	12	37	7	6	6	19	

6

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	9		7	16	4		1	5	
	1	2		2	4	10	2	5	17	
	0	1			1	7		6	13	
計		12		9	21	21	2	12	35	

9

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	3	1		4	2	2	1	5	
	1	12	6		18	16	2	1	19	
	0	5			5	3	1	1	5	
計		20	7		27	21	5	3	29	

12

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	10	2	4	16	5		3	8	
	1	11	2	1	14	4		3	7	
	0	3		4	7	2	1	1	4	
計		24	4	9	37	11	1	7	19	

14

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2		2	6	8	1	5	3	9
	1	2	1	3	6		10	5	15
	0		3		3	3	11		14
計		2	6	9	17	1	18	19	38

8

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2	13	2	8	23	1			1
	1	8	2	5	15	8		3	11
	0	2			2	4			4
計		23	4	13	40	13		3	16

18

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2		1	6	7	3	2	7	12
	1	5	1		6	7	4	9	20
	0			1	1	1	2	7	10
計		5	2	7	14	11	8	23	42

10

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2	12	1	6	19	4		2	6
	1	10		3	13	7	2	3	12
	0	1			1	1	2	2	5
計		23	1	9	33	12	4	7	23

困難な見解は、正解をみせられて後に疑問を感じるときで、正解の理由文をみせられてなおよく分からなかった（または自分の意見は反対）ときは、多い場合が多い。当然記憶される場合（L=2または1）は多い。正解をみせられて後に疑問を感じないときで、正解の理由文をみせられてよく分かったとき（K=1または2）は、全般に少ない。当然記憶される場合（L=2または1）も少ない。この結果も疑問をもち、理由文を読んでもよく分からなかったという認知的不協和の大きい場合の記憶がよくなされるという仮定に即した結果である。

表9-3 その他の見解

7

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2	4	5	18	27	3	2		5
	1	4	2	5	11	1	5	3	9
	0			1	1			3	3
計		8	7	24	39	1	8	8	17

13

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2	10	4	14	28		1		1
	1	8	2	4	14	1	3	3	7
	0	2		1	3			2	2
計		20	6	19	45	1	4	5	10

17

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2	12	1	1	14	2	2	1	5
	1	11	7	2	20	7	3	3	13
	0	1	2	1	4				
計		24	10	4	38	9	5	4	18

19

疑問		0				1				
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計	
理 解 度	2	14	3	15	32	4		1	5	
	1		9		3	12	4		3	7
	0									
計		23	3	18	44	8		4	12	

20

疑問		0				1			
記憶量		0	1	2	計	0	1	2	計
理 解 度	2	9	1	1	11	1			1
	1	22	1	2	25	2	1	1	4
	0	8	1	1	10	3	2		5
計		39	3	4	46	6	3	1	10

その他の見解は、正解をみせられて後に疑問を感じることで、正解の理由文をみせられてなおよく分からなかった（または自分の意見は反対）ときは、容易な見解と同様に全般にあまり多くない。当然記憶される場合（L=2または1）は少ない。正解をみせられて後に疑問を感じないときで、正解の理由文をみせられてよく分かったとき（K=1または2）は、記憶されない人数が全般に多い。反面この場合よく記憶される場合（L=2または1）も多い。この傾向も、容易な見解の結果と類似している。

考察

この研究では、認知的不協和が、学習にいかなる効果を及ぼすかについて検討した。被験者の見解が、正解と逸脱することの大きい場合には（困難な見解において）、記憶量が大きくなるという傾向が見られた。これは、認知的不協和理論が当てはまる結果といえよう、つまり、認知的不協和が、被験者の見解の正解からの逸脱度と深い関連を有し、認知的不協和によって学習が動機づけられ、学習（記憶）が達成されると考えられる。

しかし、先にも触れたように、動機づけられ

た状態は独立変数として扱われていないし、逸脱度そのものではない。意識としての疑問、理解不可能等が関連する概念として、取り上げられた。これらの概念の補完関係についての検討も必要である。

また、ここでは学習を従属変数としている。正解に即した見解の記憶を学習として取り上げた。これは正解の記憶であることには相違がないけれども、被験者の見解の変容としての学習を正確に把握しようとするれば、不正解の見解をもっていた被験者が、正解に転じたかどうかを調べる必要がある。しかし、ここでは単に正解の記憶を調べ、見解の変容、態度変容を見てはいない。これらの分析は今後の課題である。単なる正解についての記銘学習か、態度変容に到るものかも判然としない。この解決のためには先ず見解を等質化することから始めなければならないであろう。

参考文献

- Aronson, E. and Mills, J., 1959, The effect of severity of initiation on liking for a group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 177-181.
- Bem, D.J., 1967, Self-perception; An alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena. *Psychological Review*, 74, 3, 183-200.
- Brehm, J., 1959, Increasing cognitive dissonance by fait accompli. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 58, 379-382.
- Cottrell, N.B. and Wack, D.L., 1967, Energizing effects of cognitive dissonance upon dominant and subordinate responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 132-138.
- Festinger, L., 1957, A theory of cognitive dissonance. Row, Peterson and Co. 末永俊郎監訳 1965 認知的不協和の理論 誠信書房
- Hamilton, D.L. and Gifford, R.K., 1976, Illusory correlation in interpersonal perception; A cognitive basis of stereotypic judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 4, 392-407.
- 波多野諒余夫 稲垣佳世子 1971 発達と教育における内発的動機づけ 明治図書

- Higgins,E.T., King,G.A. and Mavin,G.H.,1982, Individual construct accessibility and subjective impressions and recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43,1,35-47.
- Janis,I., & King, B., 1954, The influence of role-playing on opinion change. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49,211-218.
- Kantola,S.J.,Syme,G.J. and Campbell,N.A.,1984, Cognitive dissonance and energy conservation. *Journal of Applied Psychology*, 69,416-421.
- Pallak,M.S. and Pittman T.S.,1972, General motivational effects of dissonance arousal. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21,349-358.
- Ross,L.,Greene,D. and House P.,1977,The "False consensus effect"; An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal Experimental Social Psychology*,13,3,279-301.
- Ross,M.,McFarland,C. and Fletcher,G.J.O.,1981, The effect of attitude on the recall of personal histories. *Journal of Personality and Social Psychology*,40,4,627-634.
- Waterman,C.K., and Katkin,E.S.,1967, Energizing (dynamogenic) effect of cognitive dissonance on task performance. *Journal of Personality and Social Psychology*,6,126-131.
- Weber,R. and Crocker,J.,1983, Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45,5,961-977.
- Zajonc,R.B.,1960, The concepts of balance, congruity, and dissonance. *Public Opinion Quarterly*, 24,280-296. バランス・適合性・不協和の諸概念について 田中靖政編訳 現代アメリカ社会心理学 日本評論社1970